

地域密着型金融に関するシンポジウム 京都会場 開催結果概要

平成22年2月15日
近畿財務局

平成21年12月10日（木）、近畿財務局京都財務事務所主催による「地域密着型金融に関するシンポジウム 京都会場」を開催いたしました。

本シンポジウムは、地域金融機関による、中小企業のライフサイクルに応じた支援、中小企業に適した資金供給手法及び持続可能な地域経済への貢献にかかる特色ある取組み等について、広く地域の皆様に紹介することにより、地域密着型金融の一層の推進を図ることとしております。

今回、京都会場につきましては、京都府の地域金融機関や企業経営者、商工団体の方々などにご出席頂き、特色ある取組み事例の顕彰、事例発表及び意見交換を行いました。

記

1. 開催日時、場所

- ・平成21年12月10日（木）13:30~16:00
- ・京都府中小企業会館

2. 参加人数

42名

（内訳）金融機関：22名、企業経営者：6名、商工団体等：14名

3. 次第

開会挨拶（京都財務事務所 澤田所長）

基調報告（近畿財務局 原田理財部長）

顕彰

特色ある取組み等の事例発表

- ・京都中央信用金庫 「事業再生ファンドを活用した再生事例」
- ・株式会社京都銀行 「企業実態把握力の向上に向けた取組み」
- ・京都信用金庫 「『京信・地域の絆づくり大賞』の創設」

意見交換会

- ・井野口 順治 株式会社京都銀行 常務取締役
- ・中田 高義 京都信用金庫 常務理事
- ・吉本 宗明 京都中央信用金庫 常務理事
- ・澤田 耕作 京都財務事務所 所長（進行）
- ・原田 要暢 近畿財務局 理財部長

4. 意見交換会（発表事例に関する質問とそれに対する各金融機関の回答）

■ 井野口 順治 （株式会社京都銀行 常務取締役）

質問「創業支援、新事業支援をしていく中で、金融機関には企業実態を見極める目利き力が求められている。若手行員の増加の中で、行員の審査能力をいかに向上させていくかという取組みをされているが、そうした専門性への対応についてもう少し幅広くお話いただきたい。」

回答「突然、業種別専門家育成研究会ができたのではなく、当行は人材育成について、常に実践的でなくてはならない、営業と直結した人材育成が必要である、と考え常々取り組んできた。それら取組みについて日々試行錯誤を繰り返し、推し進めていくと、専門性とは単にノウハウや勉強というだけではなく、それぞれの業界の例えば行政の動向や、業界の方向性などを追いかける必要も出てくる。その流れの中で、やはり審査的な目も必要であることから、業務と少し離れたところで時間を設け、徹底的に育成をしてきた。また、スコアリングや格付など計量化は大事なことではあるが、それが全てではなく、バランスシートに表れない事業の資産、技術、経営者の資質など、アナログ的発想で、目で見て耳で聞いて鼻でにおいて口で話すということが極めて大事であり、単にノウハウや知識の吸収だけではなく、そういう物の見方を習得していく仕組みということである。」

■ 中田 高義 （京都信用金庫 常務理事）

質問「地域金融機関として地域経済を支える中で、地元地域の方々の受け取り方、金融機関への期待という点についてどのようにお考えか。」

回答「我々の特性として、様々な方と日頃から接点を持ち、ミクロの情報を集積していく中で、顧客の声、地域の人が本当に求めているものをフィードバックしていく存在として、非常に良い存在であると思う。」

質問「ディスクロージャー誌の預貸率について。」

回答「地域の顧客からお預かりする預金を安全に守るのが我々の仕事であり、預貸率をコントロールするために預金を落とすようなことはない。貸出金を伸ばすことについて今苦労しており、難しいが何とかブレークスルーし、貸出金が増え預貸率も上っていくというのが望ましいと思う。」

■ 吉本 宗明 （京都中央信用金庫 常務理事）

質問「事業再生ファンドを活用した取組みをされていますが、今回の事例の中で再生ファンドを使うのが最善の判断であるという説明があったが、もう少し詳しくご説明いただきたい。」

回答「事業再生には色々な手法があるが、法的に見ると非常に難しい場合もあり、今回のファンド利用は実質的な債務免除を伴うと言える。本事例は、本業における収益低下が結果的に過大投資による債務超過を招いた形となり経営を圧迫していた点と、京都ブランドとして将来的に残したい企業と評価できる点を考慮し敢えて対応した

ものである。分かりやすく言えば、資産イコール借り入れという形を残し、優良会社に引き継がせ再生し、健全に運営していただくという形である。残りの損切りの部分はファンドで企業整理し処理をすることになるが、税務上の問題等が発生することが考えられるため、合法的にさせていただくためにも再生ファンドを活用している。これは特殊なことである。」

質問「ディスクロージャー誌の預貸率について。」

回答「預貸の問題は、根本的に運用先が減っていることである。京都の場合も事業先は非常に減っており、たくさんあった下請けも今では海外にシフトして空洞化が進んでいる。だが、基本はやはり預金を集めて、それをしっかり運用し利用していただくことが金融機関の役割であり、それをしっかり果たしていきたいと思う。」